

## 花火



高校三年生になったさくらは高校生活を悔い無き充実した日々にしようと心弾ませていた。そんなある日の昼休み。さくらは親友の万季と千夏が何か話しながらこちらへ向かって来るのが見え、ちよつと驚かせてみようかと中庭の桜の木に隠れた。そして二人が木の側まで来ると、

「千夏、黙っててね、実は初美から誰にも言わないでねって言われて聞かされたのだけど、浄君は差別を受けた村の出身なんだって、だから近寄らない方が良くって言うのよ。私ビックリしたわ、だけど偏見よねえ、誰にも言わないでネ、言わないでネ、あっ！もうこんな時間、早く教室へ戻らなきゃ。」といって踵を返した。千夏は「うそでしょ！ショック」と言って二人は駆けていった。

さくらは呆然として葉桜を見上げた。そしてキツと唇をかんだ。

放課後、放送クラブへ行き明日の打ち合わせを終えると、すぐ一人で電車に乗り帰宅した。

夕食を終え二階の自分の室へ上がると電気も点けず窓際に行き、カーテンを開けた。家々の明かりと駅前灯りがぼんやり見える。突然苦しみが湧き上がって頬に涙がホロリと落ちた。あの優しい大好きな万季があのような人を差別するよいうな事を口にするなんて、なんて寂しいことだろう。パズルのどこかがポロリと落ちたように口惜しい。そしてさくらは自分の心の奥に小さいが鋭い矢が突き刺さった事を感じた。

学校では万季からは何も言っていないが、四・五人の友達から同じような事を聞かされた。その都度、悲しみは深くなっていった。

今日は放送部と文化部の今年度最初の合同会議だ。一ヶ月先の運動会がテーマだ。室は音楽室を使わせてもらっている。

さくらは三階の音楽室に近づくと誰かがトランペットを吹いている。ジャズのような。楽しそうな声もして来る。ドアを開けると皆踊っている。誰がトランペットを吹いているのだろうと見ると、浄だ。さくらは何か胸が疼いたように思った。その内、部長も来て会議が始まった。

「今日から新しい部員が五人増えました。新入生四人と皆んなも知っての通り、野球部のピッチャーのエースだった、村上浄君です。肩を痛めて野球が出来なくなって文化部で皆んなと一緒にやる事になりました。では今年度最初の会議なので僕から自己紹介します」と次々名前が飛び出した。

さくらは「三年B組の山本さくらです。よろしくお願いします」と頭を下げた。浄の顔は見なかった。

その後も学校行事に合わせて合同で会議がもたれ、人数が多ければ多い程、豊かな内容になっていった。浄の頭の良さ、心優しさ、厳しさが際立った。

そしてその内、浄の一件は、うそ、だったと噂が流れ、なぜか初美は転校していった。

そして夏休みも近づいたある日、合同会議があり、

「今回は何点かある校外の取材です。もうすぐ夏休みに入りますが、まず一つ目は八月二日に神川で奉納花火大会があります。皆、浴衣でも着ていきますか」

みんなは「いいねえ」と言っていて、その他の夏の行事の取材と一緒にいきたい所へ名前を入れていった。

さくらは二年生と一年生の二人ずつと花火大会の取材の五人に決まった。

その時浄が「僕、お盆は親戚に行かなくちゃなくなりましたので、近頃花火行つた事ないから新鮮に映るかもしれないので花火どうかしらねえ、別の所でも良いけど」と言った。

皆だいたい人は揃っていたので「じゃ、そうしたら」と皆は言った。

さくらは何故か胸がドキドキと高鳴るのを覚え、必死に平静を装った。

夕食後、母と後片付けをしながら「お母さん、私、夏休みに入ったら大学入試の勉強もしながら合間に浴衣を縫ってみたいのだけど、おばあちゃん教えてくれるかなあ」と下を向いて言った。

母はちよつと驚いたようだったがチラツと娘の顔を見て「まだ寝てないと思うからおばあちゃんに聞いてきたら」と言つて手を拭いた。

しばらくして帰つて来たさくらは「おばあちゃんがね、里の種おばあちゃんの所へ行つて教えてもらったらと言うんだけど、どうしよう」

居間のソファでテレビを見ていた母は「そおうー」と言うとしばらく考えている様だったが、父の書斎へ行き、しばらくして戻つて来てさくらに言った。

「さくらがお客様ではなく、その家族として暮せるのなら父さんも行ってもいいけど、と言つてくれたけど……。まあ大袈裟だけど人生修行のつもりで行つてみるかなあ……。どつちみち色々な人達にお世話になるのだからその積もりでね」

さくらは「はい」とうなずいた。



「まあ、涼しそうな柄だねえ、これは夕顔かい」

種さんは畳の上に浴衣地を広げてうれしそうに見て言った。うす緑地に白く染め抜かれた大きな夕顔が美しい。そしてさくらに仕立て上がった時、ごこへどの

柄が来たら良いか考えさせた。

「私らは一日あれば浴衣位は仕立て上げたもんやけど、さくらさんはまあゆっくり縫ったらよいわねえ」と言つて生地を優しくなでた。

さくらは日頃母が可愛い布があると残してくれてあつて、時々母に教えてもらつて簡単なスカートや小物等は作つていた。パッチワークも祖母に手伝つてもらいながら玄関マット等作つて楽しんでいた。

針は初めてではなかったが、どこかまだぎこちない運びなのだ。

柄合せも何とか終え、裁断するのも汗だくである。ふと顔を上げると青田が波立ち、チリリンと風鈴をゆらして青風が座敷を通り抜けてゆく。何と美しい音色だろう。

じいつと見つめていると種さんが縫う手を休めないで「あの風鈴は娘が東北へ修学旅行に行つた時のお土産でね、もう四十年近くになるんやけど毎年毎年きれいな音色を奏でてくれて、わたしにはまるで天女になった母が奏でる演奏に聴こえて夏の楽しみの一つなんや」といつてうれしそうに笑つた。

さくらはその笑顔がどこかで見た観音様に似ているようだと思つた。

田の字の座敷のあちこちで一家が昼寝を終えて、川の水で冷やした西瓜を皆んなで頬張つてからそれぞれ散つていった。何と穏やかな家族なんだろう。さくらもすぐ溶けていった。

さくらは後片付けを終えるといよいよ縫い始めた。

種さんは「さくらさん、姿勢が良くないネ、もつと背筋を伸ばして、しやんどせんどきれいに縫えんよ」と言つてくれた。

さくらはおばあちゃんがなぜ種さんの所へよこしたのか何となくわかつて来た。さくらは何故か大事なものがあるようで正座して正姿勢になった。その内少しずつ縫い目が揃い出した。

二日目、胴に取りかかった。背縫いを始めたところへ見知らぬおばあさんがゆつくり表道を上がってくる。

縁側まで来るこちよつとお辞儀をして「種ちゃんいるかい？」と奥の方に声を

かけた。

「はいはい、いますよ、千代ちゃん何か用かね」といって麦茶を盆に乗せて出て来た。

「この可愛い娘っ子は誰かね？」

「ああ、さくらさんと言うてな、滝の孫娘なんや、夏休みで浴衣を縫うんで教えて欲しいと来たんや」

「ああ、滝ちゃんの」

「さくらさん、このお人はわたしの同級生で千代さん言うんよ」と言っただけで嬉しそうに笑った。

千代さんは「よう来たね、種さんは縫い物の名人やでよう習っていくといいわ」と目を細めた。

さくらにはにっこり笑ってお辞儀をした。

「ところで種ちゃん他でもないけど、今年も夏休みも始まったし、ひょうたん先生と年中行事のご飯でも食べようかと皆言ってるけど種ちゃん都合どう？」

「どくに何も用はないので一緒に遊ばせてもらうわ」

「そりやうれしいわ、皆んなで持ち寄って遊ぼうや。それはそうと今年も誰も仏さんにならないだもんなあ」

「竹ちゃんがもうあかんかと思うたけど、よう元気になったもんだねえ」

「ほんとによかったわなあ、そりやあの時の竹の引張り方は大したもんじゃないやっ  
たもんねえ」

「ほんと、ほんと」

さくらは思わず「竹の子堀りですか」と声をかけた。

二人は顔を見合わすどちよつと笑い、うなずいて「さくらさん話を聞かかね？」と言った。

さくらは思わず針を針山にさしてこっくりうなずいた。

「じゃ千代ちゃん話してやって下さいな、私ちよつと洗濯干しにいつてくるから、良いかのう」

「ああ、いいとも、じゃちよつとだけ話しますわのう」といって遠くの山並みに目を向けた。

「昔、昔の話だけど、今で言う小学校五年生の時こんな事があつたんや。今は何と云うか知らんけど『差別』っちゅうか、そういう土地の人や、体や頭の悪い子や、貧乏人にでも何も考えもせんと差別しとつたんや。そんな時、この村へ一人の若い先生が来て、わたしらの担任の先生になられたんや。しばらくしてある日のホームルームの時間に皆んなに『みんなは差別しているか』って聞かれるもんやから、みんな『うん』って言ったの。そしたら『なぜするのか?』って聞かれるもんやから今度は『差別された事のある人いるか』って聞かれて、自分の事とか、兄弟とか、親とか、親戚とかあるって答えたんや。そしたら先生が『どんな気持ちや?』と言われて皆、いややとか、悲しいとか、腹立つとか、言うやつ憎らしいとか世間が悪いとか答えたんや。それを先生はじいっと聞いてらした。」

千代さんは麦茶を手に取るどゆっくり半分程飲んだ。さくらは差別と聞いて息をこらして聴いていた。チリリンと風鈴が鳴った。

「それからしばらくした体操の時間に先生が竹竿を持ってこられて、十人ずつ五列にし最初の列の人達に『この竹の両側に五人ずつならびなさい。はい、そして前の鉄棒の所まで一緒に走る。その前にタスキでしっかりと目隠しをします』と行ってその場で十人に竹を持たせて三回廻らせピツと笛を吹いたの。」

アハハハッと千代さんは笑って麦茶を飲み干した。

「まあ、右へ行く子、左へ行く子で全員こけてしもうた。二組目、三組目も十歩程は行くけどこけてしまう。残りの組は歩いてゆくけど見当違いの所へ歩いてゆく所したら今度は先生は一人だけ目明の人を作り先導させたんやけど、後の九人が揃わずなかなか鉄棒まで行けなかつたんや。最後の組の目明が竹ちゃんでのう、出発する前に歩幅の大きい子を前、遅い子を一番後、そして歩き始めたら全員に一二、一二と号令をかけさせ、自分は鉄棒と皆んなを交互に見ながら引くと全員止まらせて『右へ一步』と修正しながら、ぐいぐい皆んなを目的地まで引っぱっていったのや。あれは見事で皆パチパチ手をたたいたよ。ねえ種ちゃん」

「そうだったねえ、ようわすれんねえ、さくらさんそういう事なの」

さくらは「それで、先生は何を教えたかったのかしら」

「さくらさんはどう思うかね」

「今のお話では竹さんが皆んなと一緒にやったから目的地に着いたという事かしら」

「一緒にとは何がかね」

「うくん……」

千代さんは「じゃ私はちずちゃん所へ寄って帰るわのう、さくらさんおじやましましたね」

「有り難うございました」

その時種さんが「瓜があるが持つて行かんかのう」と声をかけた。

「そりやおおきに、ちずちゃんと分けていたぐくわ」といつて前掛にくるんで帰って行つた。

勉強も終えて開け放たれた二階で遠くの蛙の声を聞きながら、さくらは蚊帳の中で横になり夜風が時々蚊帳を揺らすのをまるで水底にいるみたいだと、不思議な感覚に捕らわれていた。そして竹さんはどんな事をしたのだろう。まず最初足の速そうな人を前に置いた。多少速くなり過ぎても前の人を倒さない。そして竹を引っぱる事も出来る。足の遅い人は最後に一人で持たせた。その人は皆んなに引っぱってもらい両手で竹を持つてついてゆける。道がずれ出した時、一度止まって皆んなと一緒に右側へ一歩移動し、前進する時は目的に向かって真っ直ぐにした。斜めに走って修正しようとする目明はわかるが、目隠した人はそれぞれで、自分が今斜めに走っているのか、真っすぐなのかわからなくなり迷いの中に入つてゆく。その為走る時は真っすぐが安定するのじゃないかしら。

そうすると竹さんは皆んなが安心して竹さんに自分を任し、竹さんは皆んなの個性を最大に活かしながら自分の掛け声で全員の心を一つにし、真っすぐ走つたから目的を達成出来たのかしら、そうすると種さんが一緒とはどういう事つて聞いてくれたけど、体を上手に使い、知恵を出し、心を一つにして行動したからかしら、でも差別とどんな関係があるのだろう。わからない。と思つて、寝返りを打つた。そして風鈴の微かな音色を聞きながら寝入つていった。

今日は村の出合いとかで、朝日と共に、お寺、お宮さん、村の山の下草刈と一家

総出で出ていった。種さんはお墓だけ掃除して戻って来た。さくらは自分も何かと思つて一家全員のシーツを洗いたと言つた。種さんは喜んでくれた。洗いは洗濯機でしたが、濯ぎは家の裏を流れる小川です。小川は三つに囲いがしてあつて、一つ目はお米や野菜の洗い場、次は鯉が泳ぎ、下流に洗濯場がある。

洗つたシーツを川に入れるとヒラヒラ泳ぎ、種さんが「こうして石鹸をもみ出すんよ」といつて、ギユウギユウと揉み流した。

水飛沫がキラキラと光り足の裏の砂がこそばい。さくらは真似て時には水に流れてゆくシーツを、キャツキャツ言いながら追いかけて、最後にたらいで糊をつけ、物干し竿に干し終えた時は爽快だつた。昔話のおばあさんは川に洗濯にというのを思い出しながらさくらには夏の川での洗濯は心身共に遊びであつた。

「さくらさん、衿のここの曲がり具合が大事なところで、もう少し内側を縫つたらどうかね」

「はい」

遣り直しを三回してなんとかスツキリして来た。風鈴がチリリンと鳴つて千代さんが来た。

「今日も暑いねえ、さくらさんもう出来上がりましたかね」

「はい、もう少しで」

「種さん、この間のひょうたん先生の会ね、七月二五日の土曜日と決まつたが、どうかのう」

「わたしはそれでいいよ、又五時頃行つたら良いかね」

「女は食べ物を持ち寄つて、ちよつと会場を準備して六時頃から始めようかねえ」

「じゃ、わたしは何が良いかのう」

「御飯物が無いから何でも良いから作つてもらえるかねえ」

「ああーええよ、何かこしらえてゆくわ、一五・六人分で良かったかなあ」

「充分、充分。じゃ、よろしくね」

「ご苦労さんでした」

「さくらさん、明日で仕上がるねえ」

「はい」

風鈴の震えるような微かな音色を聞きながら、待ち針を針山に刺した。

「さくらさん、折角帰る日だったのに手伝わすねえ」

「いえ、いいんです。お料理の勉強にもなりますし、こんな大量に作った事がないので楽しいです」

「じゃ、塩づけの筍を出すから、ザルを持って来てくれるかのう」

「はい…」

「さあ出来た。重箱につめて終りだねえ」

筍・薇・椎茸・絹さや・人参・卵・海苔・酢生姜を添えて、山菜寿司が五段重ねの重箱と、自分の家族と近所へ届ける分が出来上がった。

ふと重箱をよく見るとぐるっと一周、絵が描かれている。黒の漆地に金色の模様だ。一番上の蓋は山で次から谷川・滝・川から大河になり大海原になっていく。

ふと蓋が気になって内側をひっくり返して見ると、あつと驚いた。

何と大海で鯨が潮を吹いている絵だ。

さくらは思わず「うーん」と言ってしまった。

種さんは「器もご馳走の一つだからねえ、四季折々や行事に合わせて家族で楽しんでるんやに、作る時は食べる人を思い、器を思い浮かべて、そりゃー、楽しいもんだよ」

種さんの何と幸せそうな顔、さくらもうれしい気持ちで一パイになった。

その日の夕方、種さんは浴衣を着た。私にも孫の浴衣を着てみないかと、白地にえんじの撫子の花を可憐に散らした浴衣を出して、博多帯を小さく文庫に結んでくれた。

公民館へ着くと一緒に準備を手伝った。

席も整い帰ろうと思ったその時、ひょうたん先生が来られさくらの横を通る時「誰の孫かね」と聞かれた。

種さんは「先生、妹の滝の孫娘で今日のお寿司を一緒に作ってくれて、ここまで手伝いに来てくれたさくらさんという娘です。よろしく」

「ああ、そうですね、一人でも若い娘がいると又、一段と華やくなあ、一緒に食べて行きなさい」

みんなもここにこしながらそうしなさいと言ってくれる。種さんもさくらが良ければというので仲間に入れてもらった。種さんに言ってもらってあちこちの接待をした。

竹さんのところでご飯を付けていると千代さんが通りかかり「竹さん、この間さくらさんに、ホラ五年の時の竹竿で皆んなを目的地まで引っ張って行った話をしてあげたんやに」

竹さんはちよつと驚いて、恥ずかしそうに「そんな事もあったなあ」と頭をなでた。

さくらはふいに「おじさん、皆んなを目的地に連れて行った事と差別とをどのように関連して考えたらいいのですか」と尋ねた。

竹さんは驚いてさくらをまじまじと見て「さくらさんはそれを知りたいのかね」「はい」

「そうか……。ちよつと待ってな」といってひょうたん先生の所へ行き話し込んでいる。

帰って来た竹さんが「明日ひょうたん先生の所へ行きなさい。解るよう説明して下さるそうだ。昼から二時半頃ならいいそうだがどうする?」

「伺います」

「ではそのように伝えておこう」

「お願いします」と深々と頭を下げた。



帰りが二日延びてしまった。

母に話をして了解してもらった。

薄明りの中飛び起き、露草を踏んで、胡瓜・茄子・トマト・隠元他、夏野菜を皆んなど収穫し、草取りも終えて太陽が痛くなって来た九時過ぎに家に帰って来た小川で水浴びをして粥を食べると横になって寝てしまった。

種さんに起こされてご飯と冷や汁、小魚等食べて一息入れ、ゆっくりひょうたん先生の家へ向かった。

家に着くとお姉さんのような娘さんが室へ案内して下さった。二間続きの座敷は開け放たれ莫塵が敷かれて、籐のテーブルと座椅子がずうーと昔からあるように調和している。骨董品のような扇風機が首を振っている。

座って床の間を見ると水墨画の滝が勢いよく落ちてくる。その前横に一輪の白百合が活けてある。何という清涼さ、清浄さ。一瞬冷気が過ぎつたような気がした。しばらくすると娘さんが冷茶とポットを置いていかれるのとすれ違いに先生が入ってこられた。

「よう来てくれましたね、楽にしてね、楽にね」といってさくらを愛しそうに見られた。

さくらは今日お訪ね致しましたのは、と学校の出来事も交え、差別の事が自分を苦しめている事を話した。そして種おばあさんの言っていた、竹さん達の竹の棒の件、は何を知る為だったのか知りたい、と話した。

床の間を背にして先生は簾がかかってない北側の空の入道雲を、ぼおうとして見られている。

しばらくして「そうですね。ではさくらさんにお尋ねしますが、床の間に白百合が活けてありますが、見てどう思われますか」

「とても美しいです」

「では、あの花が二週間、経ったとして、土に戻る時の姿はどうですか。」  
さくらはちよつと想像して「きれいではありません」と正直に答えた。

先生は「うん」どうなずかれてちよつと間をおかれてから「ではさくらさんが事故にあつたとして、指一本無くしたとしましょう。どのように思いますか」

さくらはギクツとしたが、親指を折って九本にし見つめた。十本にしても見つ

めた。

そして「十本は正常で、九本は足りません。きっと不自由だと思います」と言った。

先生は「うん」と言われて、又しばらく間をおいてから「では、さくらさんは百合の花が美しいと思う時ど、美しくないと思う時がありましたか、スズメが見たらどんな風に見えるでしょうね」

さくらはポカンとなった。スズメが見るってどういう事なんだろう。私はスズメではないし、わからない……。でも、私は百合の花の前で百合を見て美しいと思った。スズメは百合の花が咲いてる花畑で羽を休めて、美しいなあと見るだろうか。私は見た事もないし、話にも聞いた事がない。

「私、良く解らないのですけど、スズメは美しいとは思わないのではないでしょうか」

先生は「うん」とうなずかれて「私もスズメではないので推測しか出来ませんが美しいとか、醜いとか、思っていないように思いますね。それにスズメの目にどのように写っているのかわかりませんしね。」と言って麦茶を一口飲まれた。

さくらはホツとして飲んだ。

「では数知れない生物の中で、人のように色々思うものはどんな生き物でしょうね」

うくくん……。生き物。色々あるなあ。

水・陸・空。活動が昼、あるものは夜。

動植物にはあつと言う間に一生が終るもの、又何千年も生きているもの。その他知らないがきつといっぱいあるだろう。だが今生きていると言う事は、それぞれが生きる条件が揃ったから今生きているのではないだろうか。

さくらは、「思いがあるかどうかはわかりませんが、今生きているという事は、その生物が自然条件に合っているから今有る様に思いますか、やはり何か思っているかという事はわかりません。」と言った。

先生はまごろみから覚めたようにうなずくと「では、人間は観念動物と言われると思いますね。さくらさんの体の中にある臓器は、それぞれが、ああしよう、こうしようと思つて動いていますか」

さくらはキョトンとなり先生の顔を見た。先生はボォーと空を見ている。さく  
らも空を見た。なぜか先程の空の色と違うと思いつながら、自分の汗ばんだ手の平  
をジイーと見つめた。

誰が私の体を動かしているのだろう。そんな事考えた事がない……。  
わからない……。

さくらは正直に「私は考えた事ありません。……例えば歩く時、右足を出した  
ら次、左足と意識して出しているわけでなく、又、頭から命令が出ているのかどう  
かもわかりません。……ずうと自分の体は自然にそのように動いているように思  
います。」

「そうですか。……では、本能と言われているものがありますね。例えば……眠  
りについて、これは自分の思うように出来ますか。」  
本能、ジイーと考えてみる。

「少し位ならコントロール出来ますが、二日も眠らなかつたら体がどうにかな  
ってしまいそうで、私の思うようにはならないと思います」

「そうですか。では、先程の全ての生物で、体は自分の中の無意識で動かし、その  
上、本能で子孫繁栄が出来る生物はどれ程有ると思いますか」

さくらはハンカチで顔の汗をぬぐうと、なんでこんなに蒸し暑いのだろうと思  
って、空を見ると、辺り一面黒雲が覆っていて遠くの方でピカツと光ったような  
気がした。そして先生の言われた事をおおむ返しに何度も自分に聞いてみると、  
なぜか全てののような気がした。

「生きているものは全てののような気がします」

「そうですか。では、その上で百合が美しいと思う思いはどの生きものが持って  
いますか」

さくらは人間以外の動物が百合を愛でるだろうか。もう一度考えた。

猿は九八%人間の遺伝子と変わらないそうだが、やっぱりスズメと同じで百合  
を美しいと思える、とは思われない。

「人間だけが持っているように思います」と言って、二%の差はなんだろうと思  
って先生を見た。

先生は「生物はそれぞれの本性に添って一生を終えますが人間はその上に他の

生物と異い思考認識して生きるといふ本性基盤が有り人間たらしめていゝ所でしようかねえ、だけど用い方を間違えと、くもの巣にかかつたようにばたばたした一生を送るはめになるので氣をつけないとね」と言つて空を見られた。

その時、ピカツと光つたかと思つた四・五秒後バリバリと近くで雷が落ちた。

先生は「ちよつと休憩しましょうか。私はトイレに」と言つて立ち上り廊下へ出られると、パンパンと手を打ち鳴らされた。

しばらくすると娘さんが熱いおしぼりと、冷たい葛切りを出して下さつた。又、ピカツと光つた。雷がだんだん近づいてあたりもだんだん暗くなつて来た。その時パラパラと音がしたかと思つたらザーと雨が降つて来た。

サアと涼しい風が通り抜けてゆく。葛切りもつるつると喉を通つていった。稲光が何故かきれいに見える、花火のようだと思つた時、頭上で爆音が炸裂し、稲光が地上から天へ駆け上がつてゆくのが見えた時、さくらは薙ぎ倒されていた。

さくらは一瞬無重力の世界でふわふわ浮いている自分がいて、しばらくしてから、私どうしたのかしら’と思つた時、自分が横になつてゐるのに氣がつきハツとして座り直した。ぼおうと息しているさくらの瞳に稲光が花火のように写つては消え写つては消えて行つた。

先生が戻つてこられた時は夕立もやみ、あちこちから蝉の聲が聞こえ出した。先生はさくらの様子をチラツと見て「さくらさん、今日はこれ位にして置きますか、それとも続けますか」と問われた。

さくらは「先生、続けて下さい、お願いします」と言った。

「では、先程、指十本と九本の話をしましたが、もう一度聞きますよ。この二つのものは同じですか」さくらはじいっと指を見てしばらく考えたが

「同じではありません」

「何がですか」

「指九本は一本足りません、だから同じではありません」

「何に対して同じではないのですか」

何に対して?……。

何に対してって、それは指は十本が当り前なんだから。

さくらは先生の目を見て「指は十本が当り前なので、九本とでは一本の差があります」とハッキリ答えた。

先生は静かに「指は十本が当り前と思っているのは誰ですか」と問われた。ええつとさくらは思った。先生は何を問うていられるのだろう。両手の指を見て、じいっと考えた。指は十本確かにある。‘あたりまえ’と呟いた。何度も呟いているうちにハツとした。

『指十本』は事実、目の前にある。だけど『当り前』というのは、私の頭の内なのだ。『指九本』だとしても『足りない不自由』と思うのも、私の頭の内なのだ。

百合にしても『百合』という事実には『美しい』という、思い、が強力接着剤のようにくっついてたのだ。胸の中がスカツとして来た。

さくらは「先生、今はこのように思います。指十本は十本。九本は九本。たゞそれだけです」

先生はにこつとされ「良く考えられましたね。事実は事実、思いは思い、と分けて考えるとシンプルですね」

さくらはホツとして大きくうなずいた。

先生は「その上で良く事実を見てみると、十本と九本では同じではない、つまり差はありますね、この事は良いですか」

「はい」

「ところでさくらさんは『差別』の事を調べたかったかと思いますが、どこで『差』、から『差別』になってゆくとお思いますか」

さくらはハツとした。そうだ、その事こそ調べたかった事なのだ。どこから生まれるのだろうか。

さくらは「差別」と言ってみた。

事実には差はある。違いはある。だけど差別はどこにもない……。指を見た。確かに十本と九本は違う。たゞ違っているだけなのにどうして差別が生まれるのだろうか。

さくらはふと百合が目に入った。

そしてじいっと考えた。そして「アッ！」と思った。

そうだ、そうだった。そのものだけを見ないで思いで比べるから、良い悪い・美醜等の相対の分ける世界に入っていくのだ。

さくらは「十本の指は当り前で健康正常だけど、九本は一本欠けていて不自由で、不幸な事と思って見ていました。十本は九本に対して上、九本は十本に対して下、と見ていました。その分け方が差別を産み出していたのではないのだろうか。つまり、その分け方を自分自身の思考の内に持っている限り、次から次へいくらか心がいやでも私自身が差別を産み出し続けるのではないのでしょうか」

先生は大きくうなずくと「よく気づきましたね。相対の世界へ入ってゆくと無数の網の目に捕らわれるようになり、心が疲れ果ててしまいますね。まずは身近な周りから事実を見る練習をしていけば、自ずと真実も視え心も安らかになっていくでしょう」

「例えばどんなふうにですか」

「何でもいいんですよ……。まず人間食べなくちゃ生きられませんから、その辺からどうですかねえ」

「食べ物で事実と思いを視るとするのはどう見たらよいのでしょうか」

「さくらさんは好き・きらいがありますか」

「はい」

「じゃ、自分に聴いてみて下さい」

「えっ、何をですか」

「きらいなものに対してそのものは、'きらいなもの' ですかっね」

「うーん」

「まあ、あせらないでね」と言ってお茶を飲んだ。

さくらも飲んだ。さくらはふと竹さんの棒の件を思い出した。

「竹おじさんの目明きの件ですが、真実が視えていたから目的地まで皆んなで行けたという事でしょうか」

「いやいや、小さな子供には理念は無理でしょうね。だけど人には誰にでも直感働くものですよ。子供でも老人にでも。それぞれの子がそれぞれの位置を得て、知恵と体と心一つにして目標に向かって走ったように見えましたよ」

「それで差別は無くなったのですか」

「無理に小さな子に差別の話をして無くそうとしたわけではありません。たゞ差別のない当り前の世界、真実の世界を体得しておく事が大事だと思ひましてね色々な授業の中でどんな人でも生き物や石でも一人ひとりが異っていて当り前で素晴らしく、一人一人が自分の意見が言えるようにしてどの人も、物も大事な人なんだなあ、一つ一つが大切なんだなあど気づくよう授業しました。そして真実の世界、ほんとうに幸せな世界には楽しい事だけなんだなあど体得してもらいました。何かあつたら皆んなで知恵を出し合い行動させました。そのうち差別の話は自然に無くなつていきましたね。そんな、こんなを三十数年やってきました。その最初の生徒達が竹さんや種さん達で、今も村で楽しく暮らしています。何かあつたら寄つてほんとはどうかとやってますよ。その事が自分や他の人を幸せにするど体得しているからでしょう。その子や孫も大らかに楽しく暮していると思ひますよ」といつてうれしそうな顔をした。

さくらも大きくうなずいた。

「だけどさくらさん、思ひは持つたら良くないんだと、思ひ違ひをして、百合は美しいと思つてはいけないと、自分を縛るとぐるぐるまきになり、苦しい！と言つて悲鳴を上げる事になりますよ……。あの絵は美しいなあ、あの服は可愛いなア……とか、すきな事を思ひ切りやつてみようとか、相対的に何かと比べるのじやなく、そのもののみを味わつて豊かな感性を磨き愉快な人生を味わつて下さい。ある絵描きさんが糞ころがしの絵を描いている時、そのころがしている虫と同じように糞がとても美しく見えたそうです。人の目も視えるようになるどその人の立っている所、全て極楽浄土、天国になるのではないでしょうかね。だからせめて自分の心がいやがることは出来るだけやめて、愛しいと思ふ、正しいと思ふ心に合せてやつていつたら良いと思ひますよ。又、出来たらですが、それもそうするのが良いと自分を縛らないでね。やりたいけど、やれるかもしれないし、やれないかもしれない位で気軽にね。だからと言つていいかげんではなく、自己最高にね。

……相対の世界から絶対の世界へ一度で飛ぶのはちよつと難しいと思ふから、ぼちぼちやつて下さい。今日は小さな小さな川でも飛んだのですから、きつと世界が異つて視えてくるでしょう。いつかさくらさんも蝶のように花園を舞う日が

来るかもしれませんがね。これからが楽しみですね」と言っただけで済んだ。

さくらは何度もうなずいて聞かせてもらっていたが、ふと呟いた。

「先生、今この時にも、テレビ・新聞等で沢山の人が差別で泣いている人が報道されています。具体的にどうやって社会から負の遺産の差別を無くす事が出来るのでしょうか」

「さくらさんは今、何か差別していますか」

「いいえ、元々地球上のどこにも無かった、頭の中だけだったという事がハッキリしたのですから、私のどこからももう差別という考え方は出て来ません。」

「そうですか、それは良かったですね、さくらさんが無くす事が出来たのですから他の人も出来るでしょう。差別する人も、される人も、あると思っただけの人も、きつと気持ちの良くない事から解放されたいと思っただけの人も、社会には色々な問題があると思いますが、一つ、一つ解決してほんどうのスガタが視えればいつか明るく楽しい世界が来ると思っています。人間には、頭脳と愛と逞しい身体、という宝物を皆んな持っているのですから、さくらさんも自分が何をすれば良いか視えてくるでしょう」と言っただけで済んだ。さくらは夕食を御馳走になり、少し涼しくなり始めた野道をゆっくり歩きながら、自分の体がふわあ〜としていて足が地に着いていないような感覚になっていた。

西の空は茜色に燃え山並が影絵のように美しい。東の山の端から黄色い大きな月が登って来た。

十三夜だ。

雲が少しかかって美しい！

立ち止まってジイーと見つめていると吸い寄せられていきそうだ。その時ふいに月が浄の悲しそうな顔になった。ハッ！として首を振り振りスタスタと歩き出した。

橋の袂まで来た時、種さんが迎えに来てくれた。種さんはさくらの顔を見ると抱きしめてくれた。さくらは今までの緊張が一辺に解け、ワァ〜と泣き出した。種さんは何も言わず泣きやむまで背中を摩ってくれた。

「お母さん、おかしい所ない？」

「ええ上手に着れたわね。可愛いわよ。この巾着もおばあちゃんど作って出番があつてよかつたわねえ」

「ええ、ちよつと赤いけど、手帳や携帯等全部入ってちようどいわ、行つて来ます」

「大勢の人だから気をつけるのよ」

「ハイ！」

さくらは駅前で「これで全員集まつたわね。大勢の人達でどこもいっぱいだから離れないようにしようね」と一・二年生の部員に言った。

「でも離れてしまつたらどうする」

「その時は各自取材して帰る、でいいんじゃない。知らない所じゃないんだし」と浄が言った。

「みんなはどう？」とさくらは心配そうに言った。

「ハイ、それでいいです」

「じゃ、出来るだけ固まつて行きましょう」と言つてホームに向かった。

電車が次々と出入りしている。花火会場の駅で電車を降りて階段を登り始めた頃から、身動きが出来ない位混雑して来た。そして少しずつ離れて行つた。だが浄だけはピタリとさくらに付いている。

「皆んなど離れてしまつたわ」

「又、どこかで会えるでしょう」浄はいたつて暢気にうちわで風を送っている。花火会場行きのバス停に着いた。皆んなが待つていてくれた。

「ああよかった。大変な人ね」

「さくら先輩、もたもたしてたら置いて行きますよ」

「あつ、やつと浄先輩も来たわ」

「じゃ皆んな揃つたからバスに乗りましょう」

バスを降り堤防へ入る細い道で又、さくらは皆んなど離れてしまつた。ふと横を見ると浄がいる。なぜかホツとしてにこつと笑つた。浄も微笑んだ。

堤防がブロックで積んである所に来ると、あちら、こちら座り出している。

浄は「花火はここからでも見えるからここら辺で見ようか」と言った。

さくらは「はい」と言っていていった。

ちよつと離れた所に一メートル位の取水口のような所があり、浄はカタカタと下駄をならして飛び上り「どうぞ」と言ってお手を差し出し引っぱり上げてくれた。座ろうとハンカチを出したその下にスーパの買い物袋をサツと置き、自分のも置いて「どうぞ」と言った。

さくらはあつげにとられながらも「ありがとう」と言ってお腰を下ろした。コンクリートは昼間の熱を一パイ吸収していて熱いくらいだ。

浄が「熱いね」といってパタパタと団扇で下を扇いだ。

さくらは何故かおかしくてウフフ……と笑った。浄も笑った。そして浄が言った。

「さくらちゃん、何か変わったみたい」

「どこが」

「うくん、どこがってハッキリ言えないんだけど、夏休み前と異うように感じるんだけど、どこ、問われると……。うくん、前は何となくまだ子供ポイと言おうか、可愛いと言おうか、そんな感じだったけど……。今日は何か明るいけどどこか静かに笑っていて、微妙だけど芯が通っていると言うか、ちよつぱり大人になつたような気がするんだけど、何かあったの」

さくらはじいっと川面を見つめた。

その時突然水面が揺れ出し黄金の水が流れ出した。夕陽から真っすぐに水面も浄君も包み込み輝いている。宇宙自然界に抱かれていると実感した。水は片時も止まらず流れて行く。

浄の顔を見た。

長い睫の底に愁いを含んだような、だけど真っ直ぐな黒い瞳を見た。

太陽は全身を揺らしながら今日一日のサヨナラのダンスを舞う。大空の雲がピンク色に匂い立った。さくらの目が潤んだ。さくらはもう一度浄の顔を見て静かに話し出した。

「実は……」と喋って種さんの所で見聞きした事を全部話した。

辺りは暗くなり、水音だけが聞こえる。ふと先の方のブロックの方を見ると大勢の人が座っている。その時、子供が浄の後ろを走り抜けていった。浄はよろけてさくらの横にピタリ寄り添った。

突然大音響と共に花火が上がり始めた。

さくらは「きれいなね」と浄を見上げた時、カツと見開いた瞳の中に花火が映え輝き、ハラハラと涙の粒となって散っていくではないか。

さくらは何故かどきどきと胸が高鳴り目を伏せた時、続けざまにバーンバーンドーンと上がり始めた。まわりがウワーとなった時、浄の手がさくらの手をしっかりと握りしめ何故か震えているように感じた。さくらは又、胸がドドドーとなったがそのまま花火の中へ溶けていった。

人が帰り始めたが浄は「少し空いてからにしよう。このままここで待とう」と言っ  
て手を放さなかった。

そして浄は暗い川面に向かって呟くように話し始めた。

「僕は昔、両親達が差別された土地の出身者なんだ。僕は絶対考えないよう  
に封じて来たんだ。だから誰が何を言おうと馬耳東風で心の扉を開けなかつた。  
だから表向きには涼しそうで平気な顔してたけど、考えると心は苦しくて苦しく  
て地獄だったんだ。初美さんが僕の事をそのような土地の者と言ったのもうそで  
はないし、実はあの時、交際して欲しいと言われて僕はその気になれなくて断つ  
たんだ。それでそんな噂を流したのかもしれない。違うかもしれないけど。なぜ彼  
女が知っていたのかわかる？実は遠い親戚で彼女も苦しんでいたんだよ……  
……。でも今日、君の話聞いて僕は心底解放されたよ、もう絶対自分も他人にも差  
別という言葉は使わない、思いも持たない。たった今、この川に流してゆくよ、だ  
って元々、無かつたんだという事がハッキリ認識出来たんだもの、今は子供の時  
のような安らかな気持ちだよ。ほんとに有り難う、有り難う」と言いながら握った  
手で涙を拭った。

そしてもう一度膝を立てると顔を埋めて、忍び泣いた。さくらは手を預けたま  
ま浄が泣きやむのを待った。

堤防の上を歩き出した頃は人は疎らであった。浄は着物の袖内にさくらの手を  
握ったまま入れて歩いている。さくらは浄の気持ちを思うと手を引けなかつた。

大通りへ出るちよつと手前で浄は立ち止まりさくらをしつかりと見つめると  
「僕どつきあってくれませんか」と言った。  
さくらはそんな予感の中の花火大会だったのでこっくりうなずいた。そして二人はそおつと手を離し大通りへ出て行った。



さくらは花火大会の記事は何も書けず、二年生の谷口君のが一番良いとして取り上げた。

初秋のある日曜日、母は弟達のサッカークラブの試合で世話係として朝から出かけていた。

さくらは午後、父と祖母にお茶を入れたくなって声をかけた。

「おばあちゃんはお煎茶でいい？」

「はい、少し薄めにね」

「はい」

「お父さんはコーヒーね」

「いや、今日は紅茶にしてくれるかい！」

「はい、じゃ私も紅茶にしようつと」と言っただけで台所に立った。

父は祖母に、「お母さん、まだまだ日差しが厳しいから畑仕事無理しないで下さいね」

「はいはい、トマトもナスビもまだまだ収穫出来そうでありがたいねえ」と話している。

「おばあちゃん、クッキーどうぞ、これこの間畑で沢山採れた人参をお母さん、

キャロットクッキーにして沢山焼いてくれたの」

「そうかい……。そう言えば人参ぎらいのさくらが人参口にするようになったネ、ああ美味しいねえ」と言って側の雑誌を見始めた。

父はゆっくり紅茶を飲みながらソファーに深く腰かけ目を休めるように外を見ている。さくらは、キャロットクッキーをつまみあげて、人参は人参。きらいなものではありませんでした。いままでゴメンナサイと心で呟き、一個だけ食べた。そして紅茶を飲み干すと、側にあった新聞を手に取り、見始めた。そして社会面を開いた時、目が釘づけになった。

ある病気の少女が、『私達を差別の目で見ないで下さい』と訴えている写真付記事だ。

思わず「ひどいわ」と声に出した。

父と祖母がさくらを見、新聞に目を注いだ。

「この娘は難病を抱えて苦しみながら一所懸命生きているのに、人から蔑まれるなんて、なんて可哀相な事、ひどい、ひどいわ」と涙声になった。

しばらくして祖母はさくらが落ち着くのを見てから静かに言った。

「さくら、世の中にはまだまだいっぱい悲しい事があるねえ……。おばあちゃんの若い頃も沢山悲しい事があってね」と言って前に組んだしわしわの手を見つめながら話し出した。

「あれは私が紡績工場へ集団就職した時の十六才の頃の事なんだけど、戦後まだ社会が不安定で皆、食うか食われるかの、今では想像も出来ないような時代だったの。夜間高校へ行けるというので古里から遠く離れて紡績工場へ就職したの。夜は五時間寝れたら良い方だったわ。その頃は女の人の地位が低くて能力があっても活かせなかったの。それでおばあちゃん、簿記や算盤も習って一所懸命勉強してね、だけど無理して一年結核で療養したの。その頃結核で沢山の若い人が亡くなっていたのよ。志を抱いたまま。わたしはその療養所で大学生や教養あるハイカラさんと呼ばれる人達と友達になって色々本を読ませてもらったり、女性の地位向上をどうやって獲得するか等話を聞かせてもらったの。そしておばあちゃんなりに女性の自立が社会を良くすると確信して、そうなるようそうなるよう生きてゆこうと思ったの。復学して卒業間近、何でもやってみようと思っていた

から『女性の自立』って題でね、弁論大会へ出たいと言って先生に原稿を渡したの  
そしたら全国大会まで行って発表出来たんだよ。」

さくらは初めて聞くおばあちゃんの青春の澆刺とした、又生死を懸けた生き様  
に目を見張った。

「それで後、どうしたの」

「簿記の勉強も又働кинаがらし続けて資格を取り、会計事務所に就職出来たの。  
そして事務所の先生のお供をして会社回り等もして、おじいちゃんど知り合う事  
が出来、今さくらが居るといふ事かねえ」

「おばあちゃん、すごい行動力」

「おばあちゃんも一生懸命生きて来たけれど、多くの女性がこれがほんどじゃ  
ないかと色々な分野で一生懸命やったのよ、もちろん挫折や誹謗や、白眼視もあ  
ったけれど。それでも少しずつ社会が変革していったの。小さな力でも沢山集ま  
ると社会は変わってゆくものだねえ、でも色々現象としてはあつたけどほんどう  
の事でないど人の心の奥底まで入って行かないみたいだねえ、けれど、時、とい  
うものもあるようだねえ。又、どれだけ人を幸せにすると思われる事でも受け入  
れる素地のようなものが育ってないど、尚、早しどい事もあるしね。だけど色々  
恐れて発信するのを止めたら進歩は遅くなってしまふ、その方が怖いわねえ、だ  
から結果を顧みず人を幸せにすると思ふ事は発信し続けたら良いのじゃないか  
しら。世の中は広くて深い。諸手を挙げて待っている星のように輝いている人が、  
沢山いるんじゃないかしらねえ。アラアラ余計な事言ってしまったかしらねえ。  
失礼失礼。あらもうこんな時間。お風呂入れるようセットしておくね。ご馳走様で  
した。」と言って出ていった。

「さくら、この際お父さんから二言三言、言っておくよ」と言つて座りなおし  
て背筋を立てた。

「さくらは今、世の中の事が少しずつ見え始め、矛盾に見える事も沢山有るかも  
しれないが、さつきおばあちゃんが言っていた世界からは目を見張る程生活や社  
会が変わつて来ているだろう？ 紆余曲折はあつたとしても、ほんどうに皆んな  
がより幸せな人生を送れるよう多くの人が自分の生き方を、社会のあり方を、理

に合わせようとして築いて来たのだよ。意識的に、又無意識にね。さくらがひょうたん先生に本来無差別の理を気づかせていたゞき無意識に現象界が視え始めたから人間の創造した概念の中には、‘無’がつきつきつき、廣大無辺の自然全人一体の愛の世界が出現すると思うよ。もちろん人間は社会を創って生きてゆくだけでなく、機構と運営はずい分異うものになるだろうね。そういう世界を子孫に齎したいね、その為にも思っているだけでは実現出来ないのじゃないかね。気づいた人から自分の出来る所から誰一人、泣かなくてもよい世界へ向けてどんな小さな事でも行動し、少しでも前進させる事だと思っけだね」と言っけ紅茶を飲み干した。そしてさくらの顔を優しく見て

「だけれども一つ、世の中には色々な理由で弱い人も沢山居るのを忘れてはいけないよ。‘自分が出来るから貴方もそのように出来るはずだ’、正しい考え方だから人間なら誰でもそのように考えられるはず’、と自分の心にそのような考え方を堅く持つてしまったなら、その考え方を誰にでも剣のように振り回して、受け入れられない相手を傷つけ、悲しませ、苦しませてしまうからね。そしてもつと怖いのは自分がその言葉の剣で自分自身を裁く事になるからね。諸刃の剣と言っけね。だからこそいつも謙虚に又、正しいと思われる事でも、時計の振り子のように、‘そうかもしれないし’、‘そうでないかもしれない’、位でね。

‘宇宙自然界は真理に因っけ貫かれてる’、というのは本当だと思っけ。だが宇宙は変化し視えない事も多々有る中で、‘これが変わらぬ真理です’、と言っけ切る事は今の段階では出来ないのじゃないかね。だからこそ人間自身の成り立ちの不確かさから言っけても、人は寄っけ知恵を出し合っけ、研鑽し研鑽し、皆んなの意見を全部出し合っけ今の時点で考えられる最高点はこんな事かなあど、皆んなの納得の上でやっけゆくのかなあ。とお父さんは思っけんだ。そして今は考えられない人や、そう思えない人はそのままが良いのだよ。今、分からなくてもいつか、ハツと気づいて、‘そう考えるのもいいかも’、と気づく時が来るかもしれないし、一生、分からなくてもそれはそれで、そのままが良いのだよ。人の人生はその人自身が選び取っけゆくものだからね。

だからと言っけ、考えが違っけ溝を作っけたり、離れてしまっけのではなく、その人の今思っけている事を良く良く聴かせてもらっけ、その人は今、そう思っけんだなあ、

そりやそうだろう、自分もそのように考えたらそう思うなど思えて、‘心を合わせる’とか、‘心を添わせる’、ようには出来るからそのような人になったら良いね。ほんどの仲良しだね。

人は十人十色って言うだろう。それぞれの十人に心を合わせる。合わさせてもらえる。その事自体が幸せなんだよ。

じゃ、自分は？個性は？どこへ行ってしまうんだろう、無くなっちゃうんじゃないか、と心配しなくて良いのだよ。

相手の心に合わすという事はその人の身になる、受け入れるという事で自分の思考や特性を捨てるという事ではなく、その人を受入れ一つになって豊かな大きな人になってゆくという幸せな事なんだよ。自分の個性が冒されるという事ではないのだから、寧ろ個として際立って来ると思うよ。でもこれがなかなか難しい事で遣り甲斐もあり、楽しみでもあるね、ぼちぼちやれる所からかな。

それともう一つの立場、自分が苦境に陥った時、理性が働かなくなつて事実が視えなくなつた時等、何かのせいにしたり、人のせいにして差別をしようと思わないのに、観念的に自分を納得さす為にその考え方を知らず知らず我身の内に引き込んでしまつたりしてしまう事もあるようだねえ。そうしたいとは思わないのに、人間とはある一面とても弱いんだよ。

自分が迷つた時こそジイツと良く良く理智的に考え、事実に対応して科学的に思考し、色々な人達と（他人の事は客観的・理性的に視える事が多いからね）意見を出し合い本当の事を見出し、人が苦しんだり、悲しんだりしないで良い様原因を取り除く事が出来れば良いねえ。その為には日頃から科学的に思考する練習をしていくといいね。そして年齢・性別を問わず言える友達、言ってもらえる友達が一パイ出来るといいね。そういうのを宝を持っていると言うのだよ。」と言つてクッキーを口に入れ、紅茶をカップに注いでゆっくり飲みながら、

「だけごお父さんはある一面ながあつても安心しているんだよ。」と言つて青空に残していった飛行機雲を見ながら紅茶を飲み干した。

「さくらがオギヤーと産院で生まれて初めて抱かせてもらった時、この子は神様仏様からの授かりものだと確かに感じておじいさんに話したら『さくら』と名付けたらどうかと言つてくれてね、こんな話をしてくれたのだよ。』さくらのへやく

は農耕の神様という意味、へくらは神様の居ます所、と言って春、大地の目覚ましを知らせに来て下さった神様がある花の木に居り賜り、稲作のスタートの旗を振り下ろされたのだそうだ。その神様が居り賜わる美しい花の木を人は櫻と名付けたそうだ。その神様の業に対して村人は感謝の気持ちを現わす為に『お神酒やお供物を供え、神楽を舞い神様をお喜びさせた』という事だそうだ。

今の花見も自分が食べたり酔ったり歌ったりするのにも良いが、側に在します神様に感謝して共に喜べたらもつと楽しいだろうね。

だからさくらの心の内底には神様が居て下さるから安心なんだよ。なぜかと言うと神様はさくらの心が居心地が悪くなると、きつと「その事はほんどの事かね？」つてきつと尋ねて下さると思うからね。安心なんだよ。

もつとも、人間には誰の心の内にもその人のサクラの花は咲いているもんだとお父さんは思っているがね。色々、考え誤ることもあるが早く自分がどんな思考に落ち入ってしまったかを視て又、人に見てもらって事実の方に振り戻し、真実の方へ夢を描いて歩む事だと思ふんだ。やがて面白くて面白くてしかたのない楽しい人生が続いて行くと思うがね。ちよつと難解だったかな」

さくらは父がこんなにも自分に向き合って話してくれた事が嬉しくて「お父さん、私これから具体的に色々出て来ると思うの。そんな時道に迷ってしまえそう。お父さんと考え方を検証して行きたいわ、又お話してもいいい？」

「ああ、いいとも、大や流達もそろそろ社会に関心を示し始めたし、おばあちゃんにも入ってもらって月一回位、‘家族遊び’の日でも設けようかねえ」

「まあ、うれしい。それがいいわ、私一パイテーマを考えるわ、だけどお母さん客観的に見てくれるかしら」

「ハツハ……。まあ心配より実行かな……。そうだ今日はさくらと二人で夕食でも作るかな？」

「えっ、何を」

「そりゃ、安くて旬のものを見つけに行かなくっちゃな。大達の自転車で買物に行くか」

「じゃお母さんに連絡するね、きつと喜ぶね」と言って電話をし、心に呟いた。

今やれる人が他の人の為にやる。これって野菜や魚も私達に命を捧げてくれて全て明日の為に繋がりがあってゆくって事はさっきお父さんの言っていた、自然全人一体の愛、っていう事かしら。その輪が広がれば沢山の人と共に幸せになつて行けるんだわ、いやほんとは世界はそうなっているのに私が気づいていなかっただけかもしれない。何と広大無辺の世界！愛の世界！

さくらは思い切りペダルを踏んで風を切り父の背を追いながら目を輝かせた。

晩秋には弁論大会が有りさくらは『差別』というタイトルで応募した。ひょうたん先生に気づかせてもらった事を、もう一度ひょうたん先生に確認させてもらって、書き上げた原稿は、周囲を驚かせ多方面に光となって飛んでいった。

そしてさくらは自分の進路をはっきり見出した。自分の特性を磨き、謙虚な人を目指しながら沢山の人に助けてもらおう。言ってもらえる人になるう。そして私も人に活かされる人間になってゆく為、もっと学ぼう、もっと体を使って他と協調してゆこう、それが人として社会愛社会を引き継ぎ次代へ引き継ぐ人間としての大人への成長過程での当り前の事なんだから。

あれから一年、浄は猛烈に勉強し始めた。

自分は日本人としての核の上に地球人としての血肉をつけ、どんな人も生まれて来て幸せと人生を楽しみ合い、又不測の困難にも皆人など、知恵と体と心を一っ、にして立ち向かえる人間になるべく男として練成し、幸福社会実現に向けて生きて行く決意をしたのである。

時々二人は堤防の草むらに腰を下ろして行く水を眺め、ぽっかり浮かぶ雲に心を乗せ草笛やオカリナを吹いては夢中で話し合ったものである。

そして最後にいつも「さくら、大地の匂いと海の香りど、山の幸を限らず君にプレゼントするよ」と呪文の様に言っては手の平に大スキと書いて笑い合っていたのである。

そして浄は今日、支援を受け留学先の大学へ飛び立つ日、強く暖かい握手と「さくら、大地の匂いと海の香りよ、山の幸が溢れる平安な社会創りに一歩踏み出すね。行って来ます」と言って目を覗き込み手に唇を当てると痛い程握り締めにつこり笑って搭乗して行った。

さくらは銀色の翼が天空へ溶けて行くまで手を振り続けた。

そして機体が今にも消え入りそうになったその時、機影が突然大きな銀色の光の玉となり、さくらの全身に花火となって降り注いだ。



二〇一〇年二月二十二日

完